



故常陸介從五位下唐寄士愛以下百七十  
二名贈位ノ件

右謹テ裁可ヲ仰ク

明治三十一年六月二十一日

内閣總理大臣侯爵伊藤博文

内閣

十日

閣ハ二 六月廿百歳可七月四日達満

明治三十一年六月 日 内閣書記官

内閣總理大臣

甘文

内閣書記官長

錢

外務大臣

榎

大蔵大臣

樺

海軍大臣

加

文部大臣

今

逓信大臣

源

内務大臣

正

陸軍大臣

司法大臣

農商務大臣

黒田議長兼田

別紙唐奇常陸以下百七十二名ハ去ル廿三年二月廿四年四月十二月三日ニ贈位ノ光榮ヲ賜ハリシモノト同様明治維新前後ニ於テ國事ニ盡瘁功勞アリ  
内閣  
シ者身左案ノ通贈位上奏相成可然哉

御沙汰案

故常陸从後五位下 唐奇 士愛

故摂津守從五位下 山内 豊福

特旨ヲ以テ位階追陞セラレ

故高野 長英

外百六十九名

特旨ヲ以テ位記ヲ贈ラル

安藝

從五位下唐奇士愛

水澤

高野 長英

高松

長谷川宗右衛門

松寄 波右衛門

福井

鈴木 主税

内閣

鹿見島

鎌田 出雲

長門

山田 宇右衛門

御堀 耕助

福田 狭平

時山 直八

福岡

海津 幸一

月形 洗蔵

熊本

松村 大成

贈正四位

土佐

從五位下山内豊福

山内 兵庫

平井善之丞

小南 五郎

清岡治之助

望月 龜彌太

内閣

島村 衛吉

田内 衛吉

小畑 孫三郎

村田 忠三郎

久松 喜代馬

岡本 次郎

池内 蔵太

田所 壯輔

水戸

鮎澤 伊太夫

秋月

戸原 卯橋

長門

福原 乙之進

世良 修藏

岡山

牧野 権六郎

刈谷

宍戸 彌四郎

徳山

内閣

児玉 次郎彦

江村 彦之進

本城 清

河田 佳藏

浅見 安之丞

信田 作太夫

井上 唯一

津山

鞍懸 寅次郎

佐土原

池上隼之助

美濃

所 都太郎

福岡

鷹取 養巴

建部 武彦

金澤

松平 大貳

信濃

山本 貞一郎

内閣

鳥取

中井 範五郎

熊本

永島 三平

紀州

岩橋 半三郎

久留米

大鳥居 理兵衛

原 道太

常陸

贈後四位

佐久良 東雄

宇都宮

岸上 弘

仙臺

中島 虎之助

越後

岡村 定之丞

山崎 彌平

中村 勝右衛門

内閣

泉 仙次

稲垣 覺之丞

堀 齊

村山 秀一郎

星野 藤兵衛

美作

安藤 鏡馬

大洲

得能 淡雲

姫路

河合 傳十郎

伊丹城 源一郎

萩原 虎六

江坂 元之助

松下 鏡馬

市川 豊次

京都

六物 空満

田中 瑗磨次

千葉 郁太郎

内閣

鳥取

奥田 萬次郎

横田 友次郎

尾崎 健蔵

須山 萬

中原 吉兵衛

仙石 佐多雄

石川 一

河内

水郡 善之祐



膳所

粟屋良之助

高橋雄太郎

田河藤馬之丞

阿閉權之丞

榎島鉦之助

増田仁右衛門

深栖俊助

関元吉

渡邊宗助

内閣

土佐

前田繁系馬

鍋島采之助

森下筑馬

楠目清馬

安岡斧太郎

土居佐之助

森下儀之助

澤村幸吉

田所騰次郎

めくれず

島村	省吾	能勢	達太郎	安東	真之助	伊藤	甲之助	柳井	健次	上岡	瞻治	尾寄	幸之進	中平	龍之助	那須	俊平	柏原	禎吉	内閣	近藤	次郎太郎	石川	潤次郎	千屋	金策	井原	應輔	島	浪間	宮地	宜蔵	大利	鼎吉	近藤	昶次郎	澤村	總之丞	宮川	助五郎
----	----	----	-----	----	-----	----	-----	----	----	----	----	----	-----	----	-----	----	----	----	----	----	----	------	----	-----	----	----	----	----	---	----	----	----	----	----	----	-----	----	-----	----	-----

上田 楠次

小笠原 只八

安岡 覺之助

島村 雅事

島村 洲平

古澤 南洋

片岡 孫五郎

岡山

岡 元太郎

大和

内閣

丸田 監物

藤井 織之助

深瀬 仲磨

乾 十郎

伊澤 宜庵

橋本 若狭

贈正五位

土佐

寺尾 権平

柏原 省三

木下嘉久次	木下慎之助	吉本培助	田中収吉	安岡鏡馬	川島總次	檜垣繁太郎	千屋熊太郎	宮田頼吉	横山英吉	内閣	宮地孫市	小川官次	岡松惠之助	新井竹次郎	宮田節齋	豊永芥馬	須賀恒次	野老山吾吉郎	藤寄八郎	安藤録治
-------	-------	------	------	------	------	-------	-------	------	------	----	------	------	-------	-------	------	------	------	--------	------	------

藤寄吉五郎

山本 忠亮

安岡 勘馬

豊永 伊左馬

小松 勇道

素原 義之助

中島 興一郎

掛橋 和泉

小松 小太郎

大和

内閣

沖垣 齋宮

沼田 龍

前倉 温理

佐古 高郷

鳥取

加須屋 貞蔵

高濱 鏡之助

大谷 準蔵

贈後五位

蔵之助 行 蔵 准蔵 大谷 準蔵

藤寄吉五郎

山本 忠亮

安岡 勘馬

豊永 伊左馬

小松 勇道

栗原 義之助

中島 興一郎

掛橋 和泉

小松 小太郎

大和

内

閣

沖垣 齋宮

沼田 龍

前倉 温理

佐古 高郷

鳥取

加須屋 貞蔵

高濱 鏡之助

大谷

贈後五位

安藝賀茂郡竹原町

唐崎常陸介

右夙ニ皇運ノ衰替ヲ慨キ幕府ノ專横ヲ憤  
リ高山彦九郎ト意氣相投シ共ニ竊ニ計  
畫スル所アリテ京師ノ諸播紳家ニ出入シ  
又久留米熊本萩小倉等ノ諸藩ニ往来シ  
稍幕吏ノ耳目ニ觸ル所アルニ及ヒテ彦九  
郎久留米ノ旅寓ニ於テ自殺シ常陸介モ亦  
平生ノ手記及同志往復ノ書翰ヲ火中ニ  
投シテ其痕跡ヲ隱匿シ終ニ屠服シテ死ス實  
ニ光格天皇ノ寛政八年十一月ナリ常陸介其  
奉仕スル所ノ磯宮八幡神社境内ノ大石ニ  
宋ノ文天祥真蹟忠孝ノ二大字ヲ勒シテ  
以テ衆庶ニ誨誡ス此一事ヲ見テモ亦以テ  
平生志ス所ヲ見ルニ足ル

陸中國膽澤郡水澤町

高野長英

右草莽ニ在テ豪宕不羈ノ才ヲ抱キ  
學漢洋ニ通シ志國家ニ存ス天保九  
年戊戌十月英將「モリソン」渡航ノ説ア  
ルニ際シ幕議ノ失當ヲ憂慨シ夢  
物語ヲ著シテ田原藩渡辺登等ノ  
同志ニ示ス其草稿世間ニ傳播ス  
ルヤ幕府ニ於テ政事ヲ誹謗シ人  
心ヲ盪惑スルモノト論シ之ヲ獄ニ  
繫ク長英獄ニ在ルコト三年會火  
災アリ身ヲ脱シテ少ラク江戸ニ潜  
伏シ郷里ニ帰リ母ニ謁シテ不孝ノ  
罪ヲ謝ス尋テ伊豫宇和島ニ遊フ  
藩主伊達宗城竊ニ蘭書ノ翻譯ヲ命  
ス後江戸ニ還リ薩摩藩主嶋津齊  
彬ノ囑托ヲ受ケテ又蘭書ヲ翻譯  
ス嘉永三年庚戌ニ至リ幕吏ノ探  
知スル所ト為リ捕吏ノ家宅ヲ圍ム



ニ及ヒテ遂ニ自刃ス

内閣

元高松藩

長谷川宗右衛門

右風ニ尊王憂國、念深ク水戸藤田誠之進會澤恒蔵勝野豊作美濃梁川新十郎等ト親密ニ交ヲ結ヒ幕府ノ失政ヲ慨憤シ國運ノ振興ヲ謀畫ス嘉永癸丑ノ歲米國使節渡來スルニ方リ宗右衛門海防論數篇ヲ作り三條實萬ニ依リ之ヲ朝廷ニ獻シ徳川齊昭松平慶永ニ依リ亦之ヲ幕府ニ上ツル是ヨリ廣ク四方ノ志士ト交リ京都江戸ノ間ニ往来シテ密ニ國事ヲ議ス安政丁巳ノ歲藩命ヲ以テ幽錮セラレ翌戊午ノ歲ニ至リ逃之シテ京都ニ入り梁川新十郎頼三樹三郎梅田源次郎僧月照等ト密ニ畫策スル所アリテ直ニ江戸ニ至ル幕吏ノ日下部伊三次ヲ捕フニ及ヒテ奔リテ水戸ニ至リ高橋多一郎ノ家ニ匿ル遂ニ亦幕吏ノ為ニ捕ヘラレ高松ニ於テ永押込ニ處セラレ後大赦ニ遭ヒ再ヒ京都ニ出テ木戸孝允岩下方平等ト交リ益スカク國事ニ

致ス元治甲子ノ歲伐長ノ事起ルヤ一橋慶  
喜ニ就キ寛宥ニ處サンコトヲ痛論シ宥ニ長  
州ニ至リ謀ル所アリ大阪ニ還ルニ及ヒテ  
幕吏ノ謀知スル所ト為リ遂ニ藩命ニ依リ  
致仕ス明治戊辰ノ歲高松藩ノ方向ヲ誤  
マルニ際シ宗右衛門匡救ニ盡瘁スルニ却テ  
俗論黨ノ為ニ忌嫌セラレ獄ニ繫カル翌己  
巳ノ歲刑法官其冤罪ヲ憫ミ之ヲ釋ク未  
タ幾ナラスシテ病ニ罹リ没ス

松崎淡右衛門

右夙ニ勤王ノ志ヲ抱キ長谷川宗右衛門  
ト共ニ國事ニ盡カシ文久元治ノ間京坂ニ  
往來シ四方ノ志士ト交ル慶應乙丑ノ歲ニ  
至リ藩ノ俗論黨ノ為ニ忌憚セラレ獄ニ繫カ  
ル明治戊辰ノ歲朝命ヲ以テ幽囚ヲ釋カレ  
尋テ執政ト為リ藩政ヲ革新ス又俗論黨  
ノ為ニ疾マレ登城ノ途中ニ於テ殺サル

元福井藩

鈴木主税

右夙ニ經世ノ志ヲ抱キ藩主松平慶永ヲ  
輔依シ常ニ國事ヲ以テ自ラ任ス天保ノ末  
年ヨリ海外諸邦ノ船舶我カ邊海ニ出沒シ  
昔日ノ形勢ニ非スト雖幕府姑息ヲ事ト  
スルヲ以テ主税窵ニ之ヲ憂フ嘉永癸丑ノ  
夏米國使節渡來スルニ方リ主税此機ニ  
乘シ幕政ヲ改革シ全國ノ軍備ヲ擴張セ  
シメント欲シ意見ヲ慶永ニ上ツル慶永之  
ヲ納レ屢外事ヲ處スルノ策ヲ老中阿部  
伊勢守ニ進ム主税皆起草セリ而シテ主  
税深ク水戸藤田誠之進熊本長岡監物  
尾張田宮弥太郎等ト交ヲ結ヒ時難ヲ救  
濟スルノ要務ヲ論シ又橋本左内ヲ薦メテ  
慶永ノ帷幕ニ參預セシム當時藩論ヲ一定  
シ藩扈ノ任ヲ盡サシメシハ主税ノ力尤モ  
多キニ居ル

元鹿兒嶋藩

鎌田出雲

右夙ニ尊王憂國ノ念深ク弘化甲辰ノ歲  
佛英二國ノ軍船琉球ニ渡来シ貿易ヲ請  
フニ方リ藩主嶋津齊興ノ命ヲ奉ケ異國船  
掛寄ノ職ニ就キ尋テ海岸防禦掛ニ轉シ洋  
式砲術獎勵ノ方法ヲ議ス此後鹿兒嶋ニ於テ  
始メテ洋式ノ軍艦ヲ製造スルニ際シ出雲水  
兵ヲ作りテ之ヲ運轉シ遂ニ江戸ニ航シテ幕  
府ニ獻ス藩世子齊彬ノ襲封スルニ及ヒテ  
出雲益ス信用セラレ朝幕一致外事處置  
ノ計策ニ參畫ス西郷隆盛岩下方平等皆  
之ニ属シテ周旋ス安政戊午ノ歲井伊掃部  
頭大老ト為リ朝幕乖離ノ形勢切迫スルノ  
時ニ方リ出雲江戸ヨリ京都ニ往ク近衛左  
大臣僧月照ヲシテ密ニ朝旨ヲ傳ヘ禁闕守  
衛ノ兵ヲ出サンコトヲ促サシム出雲命ヲ奉  
シ苦心計畫スルノ際齊彬卒去ノ訃音ヲ接  
シ忽々國ニ還リ暴ニ病ニ罹リ没ス

元長門藩

山田宇右衛門

右夙ニ心ヲ國事ニ留メ安政甲寅ノ歲藩兵ノ相州海岸ニ警備スルヤ總奉行益田彈正ニ属シ邊防ノ事宜ヲ參畫シ己未ノ歲藩主ノ命ヲ兼ケ山田亦助來原良藏等ト兵制改革ニ後事シ銃隊ノ制ヲ創ム文久壬戌ノ歲藩主父子ノ王事ニ鞅掌スルヤ宇右衛門出テ學習院御用掛ト為リ日夜國事ニ盡カシ翌

癸亥ノ歲本國ニ還リ攘夷ノ事ニ周旋シ元治甲子ノ歲俗論黨ノ為ニ職ヲ褫カル翌乙丑ノ歲藩論及正ノ時ニ方リ新政府ヲ組織シ木戸孝允廣澤真臣等ト政務ヲ處理シ幕兵來伐ノ役ヨリ藩兵上京ノ議マルニ至ルマテ拮据經營頗ル盡瘁ス慶應丁卯ノ冬疾ニ罹リ大政維新ノ大詔ヲ見スシテ没ス

御堀耕助

右夙ニ尊王ノ志厚ク文久年間京師ニ出テ國事ニ周旋ス中山忠光大和ノ一擧ニ敗レ

大坂ニ逃ル、ニ及ヒテ耕助之ヲ擁護シ藩  
地ニ還ル元治甲子ノ歲福原越後ニ属シ京  
師ニ勇戦シ繼テ英佛米蘭聯合ノ軍船赤間  
関ニ來襲スルヤ御指隊ヲ率ヰテ赴援防戦シ  
慶應乙丑ノ歲藩論反正ニ際シ武功尤多シ  
翌丙寅ノ歲幕兵來伐ノ役ニ於テ亦切アリ  
丁卯ノ冬藩兵上京ニ臨ミ惟慎ニ在テ密議ニ  
参シ大政維新ノ後ハ藩政改革ニ盡カシ尋  
テ疾ヲ獲テ没ス

福田 俠平

右夙ニ尊王ノ志ヲ抱キ沈勇大略アリ文久  
癸亥ノ歲奇兵隊ニ入り元治甲子ノ歲赤  
間関ノ役ニ盡カシ慶應乙丑ノ歲藩論反正  
ニ際シ切尤多シ翌丙寅ノ歲幕兵來伐ニ  
方リ小倉口ニ進戦シ毎ニ軍議ニ参ス丁  
卯ノ冬京師ニ上リ岩倉具視ノ邸ニ於テ廣  
澤真臣品川弥二郎ト討幕ノ密詔ヲ受ケ  
テ藩ニ歸ル明治戊辰ノ歲東征ノ師ニ後ヒ  
北越陸奥ニ進戦シ大ニ籌畫スル所アリ事  
平ヲクノ後疾ヲ獲テ没ス

時山直八

右夙ニ帝室ノ式微ヲ慨キ吉田松陰ニ師  
事ス文久ノ初久坂玄瑞ト京都江戸ノ間  
ニ奔走シカヲ王事ニ致ス癸亥ノ歲攘夷  
ノ詔降ルヤ玄瑞ト赤間関ニ還リ率先シテ  
外船ヲ砲撃シ其後京都ニ出テ、又國事ニ  
周旋ス會マ小笠原圖書頭上京奸計ヲ旋  
ストノ説熾シナリ直八憤慨シ之ヲ途上ニ  
刺サントス元治甲子ノ歲京都ノ一舉ニ  
奮戦シ事敗レテ藩ニ還ルヤ赤間関ノ戦役  
アリ直八奇兵隊ノ軍監ト為リ防戦尤カム  
慶應乙丑ノ歲藩論反正及翌丙寅ノ歲幕兵  
來伐ニ際シ共ニ武功アリ明治戊辰東征ノ  
役奇兵隊ノ參謀ト為リ北越ニ進軍シ遂ニ  
朝日山ニ戦死ス

福原乙之進

右夙ニ王室恢復ヲ以テ志ト為シ文久壬戌  
ノ歲久坂玄瑞ト同ク京都ニ上リ尊攘ノ  
事ニ執掌シ尋テ長井雅樂ノ議スル所朝  
旨ニ背クヲ憤リ之ヲ刺サントシ果サスシテ



禁錮セラルル既ニシテ赦サレ江戸ニ往キ久坂  
及ヒ高杉晋作等ト御殿山ノ外國館ヲ燒ク  
翌癸亥ノ歲京都ニ在リテ國事ニ奔走シ  
又江戸上毛ノ間ニ往来シ新田氏ヲ勸誘シ  
テ義旗ヲ舉ケシメントシ且同志ヲ糾合シ  
大ニ計議スル所マリ幕府ノ捕吏俄ニ至ル  
ヲ以テ自ラ免ヌカル可カラサルヲ知リ刀  
ヲ拔キ吭ヲ断ツテ死ス

世良 修 蔵

右初メ奇兵隊ノ書記ト為リ慶應乙丑

藩論紛擾ニ際シ同志ト謀リ兵ヲ募リテ第  
二奇兵隊ト称ス翌丙寅ノ歲幕軍大嶋郡  
ヲ襲撃ス修蔵第二奇兵隊ヲ率<sub>テ</sub>赴戦シ  
テ遂ニ之ヲ走ラス丁卯ノ冬京都ニ上リ明  
治戊辰伏見ノ役起ルニ及ヒ四條少将ニ後  
ヒ姫路藩ヲ伏罪セシメ尋テ奥羽鎮撫使  
參謀ト為リ九條總督ニ後ヒ仙台ニ至リ軍  
ヲ進メテ會津封境ニ臨ミ屢戦鬪ス仙台米  
澤等聯合會津ヲ援助スルニ方リ福嶋ノ旅  
舎ニ於テ賊兵ノ為ニ襲撃セラレ終ニ斬殺

セ  
ラ  
ル

内  
明

151

元福岡藩

海津幸一

右夙ニ尊攘ノ大義ヲ執リ一藩ノ正論  
黨ニ推重セラレテ首領ト為ル萬延庚  
申ノ歲藩主齊漣東觀ニ方リ幸一皇  
室ヲ遵奉シ幕政ヲ匡正スヘキノ必要  
ヲ説キ其行ヲ諫止ス藩主大ニ悟リ志  
士ヲ採用シ藩政一變ス文久壬戌ノ歲  
俗論黨ノ誣構ニ罹リ削祿幽閉ヲ命  
セラル元治甲子ノ歲伐長ノ役起ルニ  
及ヒ正俗ニ論黨軋轢益甚ク終ニ死罪  
ニ處セララル

月形洗蔵

右月形深蔵ノ長子ニシテ夙ニ徳川光  
國ノ風ヲ慕ヒ切ニ皇運ノ不振ヲ慨キ首トシテ  
大義名分ヲ正スヲ以テ自ラ任ス文久辛酉藩  
主黒田齊漣ニ謁シテ尊王ノ義ヲ辯シ且數千  
言ノ時務策ヲ上ツル遂ニ藩ノ有司ノ忌諱ニ  
觸レ政治ヲ妨害スト論セラレ収祿禁錮

ノ罰ヲ受ク後赦ニ遭フニ及ヒテ薩摩  
ノ西郷隆盛長門ノ高杉晋作ト交ヲ  
結ヒ時難ヲ救済スルヲ計議シ共ニ皇  
室ヲ振興センコトヲ誓ヒ國事ニ奔走  
ス元治甲子ノ歲伐長ノ師起ルニ際  
シ洗蔵薩長合和ノ論ヲ建テ苦心盡力  
シ三條實美等ノ太宰府ニ寄寓スル  
ヤ屢往キテ謁シ密ニ謀畫スル所アリ  
後藩吏ノ為ニ嫌疑セラレ遂ニ獄ニ繫  
カレ死罪ニ處セララル

鷹取養巳

右夙ニ尊王ノ志ヲ抱キ安政戊午ノ歲  
僧月照幕吏ノ逮捕ヲ避ケテ福岡ニ来  
ルヤ養巳之ヲ城下ニ潜匿セシメテ共ニ  
國事ヲ論シ其搜索急迫ナルニ臨ミ  
遂ニ薩摩ニ逃レシム萬延年間月形洗  
蔵等ト藩主ニ建議シ藩論ヲ一定シテ  
力ヲ皇室ニ致サシコトヲ謀ル有司ノ  
忌憚スル所ト為リ罪ニ陷ラレ叔祿禁  
錮ノ罰ヲ受ク後赦ニ遭フニ及ヒ時事ノ

益ス非ナルヲ見テ憤慨ノ餘屢藩主  
ニ建言シテ國家ノ要務ヲ論ス元治甲  
子ノ歲伐長ノ師起ルニ際シ解兵寛  
宥ノ説ヲ執リ各地ニ奔走盡瘁シ藩  
ノ俗論黨ノ誣構スル所ト為リ終ニ死  
罪ニ處セラレ

建部武彦

右夙ニ勤王ノ志厚ク文久以降國事ニ  
執掌シ元治甲子ノ歲伐長ノ師起ル  
ニ際シ藩主ノ命ヲ羨ケ長門ニ往キ毛  
利父子ニ進ムルニ恭順謹慎ノ説ヲ以  
テシ又廣嶋ニ往キ總督徳川慶勝ニ  
進ムルニ解兵寛宥ノ議ヲ以テス頗ル其  
納ル所ト為ル既ニシテ藩論俄ニ變  
シ自家ニ禁錮セラレ終ニ自刃ヲ命セ  
ラル

熊本醫

松村大成

右幕府ノ専横ヲ憤リ朝威ノ衰替ヲ慨  
キ時機ヲ見テ大ニ為ス所アラントス少  
壯ニシテ家塾ヲ開キ子弟ヲ誨誡スルニ  
名分ヲ正シ大義ヲ明ラカニスルコトヲ  
以テシ又武技ヲ練リ孫吳ノ兵ヲ講ス  
嘉永癸丑米國使節渡来ノ時ニ方リ弟  
永嶋三平ヲ関東ニ遣ハシ志士ト交リ

内閣

聲息ヲ通セシム安政萬延年間ニハ平野  
次郎ト親征ノ事ヲ謀ル文久壬戌伊牟  
田尚平安積五郎等ノ九州ニ来リ義徒  
ヲ募ルノ時ニ方リ宮部鼎蔵等ト密議  
ヲ凝ラシ平野次郎真木和泉守小河弥  
右衛門等ト周旋盡カス熊本藩勤王説  
ノ勃興セシハ大成ノ力多キニ居ル翌癸  
亥ノ歳三條實美等ノ西奔ノ後藩命ヲ  
以テ幽錮セラレ慶應丙寅ノ冬先帝登  
遐スト聞キ慟哭病ヲ成シ血ヲ吐キ終

ニ斃ル

永鳥三平

右毎ニ學問ノ道ハ皇學ヲ頭腦ト為シ  
漢學ヲ胸襟ト為シ洋學ヲ四肢トシテ  
我カ國威ヲ四表ニ光被セシムヘシト説  
キ後進ヲ勵マスニ名分ヲ正シ大義ヲ  
明カニスルコトヲ以テシ權略ニ富ミ其  
策畫スル所口人ノ意表ニ出ツ嘉永ノ  
初宇内ノ形勢ヲ觀察シ士氣ヲ振ハシ  
軍備ヲ修メ國家ヲ作興センコトヲ志

シ兄松村大成ト謀リ筑豊長防藝備  
ヲ経テ京師ニ上リ梅田源次郎等ト交リ  
ヲ結ヒ米國使節渡来スト聞クニ及ヒ  
江戸ニ抵リ同藩宮部鼎蔵長門吉田  
寅次郎松代佐久間修理等ト相會シ時  
務ヲ議ス又水戸安嶋帶刀藤田誠之進  
等ト幕府継嗣ノ事ヲ論シ尊攘ノ大義  
ヲ振起センコトヲ謀ル後國ニ還リ謹  
責ヲ受ケ禁錮セラレ文久癸亥ノ歲朝  
廷ヨリ徵命下リ出祭セントスルニ際シ



八月十八日ノ夜起リ出京ヲ停ム未タ  
哉クナラスシテ疾病ニ罹リテ没ス

内

閣

土佐支藩

山内攝津守豊福

右夙ニ勤王ノ志ヲ抱キ西洋ノ兵式ヲ以テ  
士卒ヲ訓練ス慶應丁卯ノ冬諸藩上京  
スヘキノ朝命マリ豊福疾ニ罹リテ江戸ニ  
在リ時勢ノ切迫ヲ見テ病ヲ扶ケ上京スヘ  
シト決意シ之ヲ宗藩ニ詢フニ未タ其答  
報ヲ獲サルニ先チ伏見ノ役起リ徳川慶  
喜ノ逃レテ江戸ニ還ルニ遭遇シ慶喜諸  
藩主ヲ営中ニ延見シ再舉西上ヲ議ス  
列席ノ諸藩主皆同意ヲ表ス豊福獨リ  
其不可ヲ爭ハント欲セシモ慶喜已ニ席ヲ  
退クヲ以テ機ヲ失ヒ快々トシテ歸邸ス其  
夜京師ノ實報達シ官軍東下スト聞キ大  
ニ前日ノ軍議黙從ニ類スルヲ悔ヒ痛憤已  
ム能ハス遺書ヲ裁シテ以テ朝廷ニ貳心ナキ  
ヲ明カニシ終ニ屠腹シテ死ス夫人松平氏  
之ニ殉ス

土佐

山内兵庫

右山内豊信ノ弟ニシテ支族山内大隅ノ  
養子ト為リ豊信幕府ノ譴責ヲ受ケ品  
川ノ邸ニ幽居スルヲ慨歎シ藩中有志  
ノ士ヲ延見シ時事ヲ討論ス文久辛酉  
武市半平太江戸ヨリ還リ尊攘ヲ唱フ  
ルヲ贊助シ翌年那須信吾等參政吉田  
元吉ヲ暗殺シテ亡命スルヤ藩吏之ヲ追捕

内閣

ス其黨大ニ激シ元吉ノ餘黨ヲ麤殺セン  
コトヲ謀ル兵庫書ヲ半平太ニ致シテ鎮  
撫ヲ命シ且藩廳元吉ノ餘黨ヲ排斥シ  
小南五郎右衛門平井善之丞等ヲ擧用  
ス是ニ於テ一藩ノ士氣大ニ振フ癸亥  
ノ歲佐幕黨稍々要路ニ登リ藩論一變  
シ半平太等獄ニ繫カル兵庫痛憤シ豊  
信ヲ見ル毎ニ時務ヲ論シ半平太等ヲ赦  
サンコトヲ請フ遂ニ嫌疑セラレ豊信ニ  
見ルコトヲ禁セラレ鬱々病ヲ成シ慶應

丙寅ニ至リ遂ニ没ス

平井善之丞

右武市半平太尊攘ノ説ヲ助ケ舉藩勤  
王ノ事ニ盡カス文久壬戌ノ歳吉田元  
吉横死ノ後小南五郎右衛門ト大監察  
ト為ル議奏中山忠能ノ内勅ヲ藩主ニ  
傳フルヤ五郎右衛門ト相謀リ之ヲ遵奉  
スルコトニ盡カス藩主ノ朝覲スルニ及ヒ  
テ五郎右衛門扈後シ善之丞留リテ藩  
政ヲ改革シ時勢ニ應センコトヲ務メ逞

内閣

ニ五郎右衛門ト声息ヲ通シ藩主ヲシ  
テ王事ニ盡瘁セシムルノ經畫ニ苦心セ  
リ翌癸亥ノ歳藩論大ニ變シ職ヲ罷メ  
ラル武市半平太等ノ獄ニ下ルニ及ヒ書  
ヲ藩主ニ奉リ時事ヲ痛論シ且半平  
太等ヲ宥センコトヲ請フ終ニ用ヒラレ  
ス憤懣ノ餘ニ病ヲ癸シ慶應乙丑ニ至  
リテ遂ニ没ス

小南五郎

右初メ五郎右衛門ト称ス安政年間

藩主豊信ニ從テ江戸ニ在リ外交ノ事  
日ニ迫ルヲ以テ豊信水戸越前ニ藩ト密  
ニ謀ル所アリ五郎右衛門常ニ之ヲ贊襄ス戊  
午ノ歲京師ニ潜行シ三條内大臣實萬ニ  
謁シ豊信ノ密旨ヲ傳ヘ江戸ニ復命ス大獄  
ノ起ルニ及ヒ豊信退隱シ五郎右衛門モ  
亦國ニ還サレ幽錮セラル文久辛酉ニ至テ  
赦ニ遭ヒ武市半平太ノ尊攘説ニ左袒シ  
舉藩勤王ノ事ニ盡カス翌年平井善  
之丞ト大監察ト為ル中山忠能ノ内勅  
ヲ藩主ニ傳フルニ及ヒ平井善之丞ト  
頗ル盡カスル所アリ五郎右衛門藩主  
ニ從テ京師ニ至リ青蓮院親王三條實  
美姉小路公知等ニ謁見シ屢其咨問ニ對  
フ勅使東下ニ及ヒ之ニ扈從ス癸亥ノ  
歲藩論大ニ變シ職ヲ罷メラル慶應乙  
丑半平太等屠服ノ命ヲ受クルニ際シ  
族祿ヲ褫奪セラレテ家ニ禁錮セラル  
明治維新ノ後ニ至テ没ス

清岡治之助

右文久壬戌京師ニ在リ勅使姉小路公知ノ  
東下スルヤ之ヲ護衛ス翌年藩論一變シ  
武市半平太等獄ニ下ルヤ屢藩廳ニ建言  
シ及正ヲ謀ル遂ニ用ヒラレサルヲ憤慨シ  
元治甲子ニ至リ清岡道之助等二十余  
人ト死ヲ以テ藩廳ニ迫リ半平太等ヲ  
救ヒ且援兵ヲ長門藩ニ出サシメントス  
藩吏盡ク之ヲ捕フ治之助終ニ梟首セ  
ラル

望月龜弥太

内閣

右武市半平太ニ同盟シ文久壬戌江戸  
ニ赴キ勝麟太郎ノ門ニ入り航海術ヲ學  
ハントシテ京師ニ留マリ密ニ同志ト謀  
リ長門藩ト通シ京師ヲ一掃セントス翌  
年ノ夏同志ト三條池田屋ニ會ス會藩  
ノ偵知スル所ト為リ突然逮捕ニ逢ヒ  
奮闘之ニ死ス

島村衛吉

右文久辛酉江戸ニ在リ武市半平太ト  
共ニ水戸薩摩長門三藩ノ士ト交リ尊

攘ノ説ヲ唱ヘ終ニ土佐ニ帰り同志ヲ  
募ル翌年勅使三條實美ノ東下スルヤ  
之ヲ護衛ス癸亥ノ歳藩論一變スルニ  
及ヒ半平太等ト同ク獄ニ繋カル尋テ  
拷問ヲ受クルコト數十回慘酷ヲ極ム  
ト雖其實ヲ吐カス慶應乙丑遂ニ拷問  
ノ為ニ死ス

田内衛吉

右武市半平太ノ弟ニシテ尊攘ノ説  
ヲ唱ヘ人心ヲ鼓舞ス文久壬戌同志  
ト江戸ニ赴キ後半平太ト共ニ獄ニ下  
リ元治甲子ニ至リ終ニ獄中ニ死ス

小畑孫三郎

右武市半平太ニ同盟シ文久壬戌上京内  
勅ヲ藩主ニ賜ハラシコトニ周旋ス翌年  
三條實美守衛ノ負ニ加ハリ京師ノ  
形情報告ノ為メ土佐ニ還リ半平太等  
ト同ク獄ニ繋カル慶應丙寅遂ニ獄中  
ニ死ス

村田忠三郎

久松喜代馬

岡本次郎

右武市半平太ノ同盟者ニシテ江戸京師ノ間ニ奔走シ水戸薩摩長門三藩ノ士ト交リ國事ニ盡カシ藩論一變スルニ及ヒ獄ニ繫カレ拷問教回遂ニ斬ラル

池内蔵太

右武市半平太ト共ニ諸藩ノ士ト交リ西東奔走國事ニ盡カス藩論一變ノ後脱藩京ニ入り吉村寅太郎ト謀リ

内閣

馬関ニ赴キ高杉晋作ニ議スル所アラントス遂ニ中山忠光ヲ奉シ兵ヲ大和ニ奉ケ事敗レテ長州ニ奔ル元治甲子長門藩歎願ノ事アルニ際シ其隊中ニ加ハリ戦敗レテ又長州ニ奔ル坂本龍馬ノ海援隊ヲ組織スルヤ專ラ之ニ從事ス慶應丙寅五嶋洋塩屋崎ニ於テ船覆リテ溺死ス

田所壯輔

右武市半平太ニ同盟シ國事ニ盡カ



ス文久癸亥長門藩ノ英船ヲ砲撃ス  
ルヤ土佐ニ還リ藩主ニ謁シ攘夷ノ實  
ヲ舉ケンコトヲ論ス是ニ由テ謹慎ヲ  
命セラル後半平太等ノ獄ニ下ルニ  
及ヒテ脱藩長門ニ赴リ元治甲子長  
門藩人ノ隊ニ加ハリ京師ニ戦ヒ事  
敗ルニ及ヒテ又長門ニ還リ終ニ  
自殺ス

前田繁馬

鍋嶋米之助

内閣

右夙ニ尊王ヲ唱ヘ文久癸亥中山忠  
光ヲ奉シ兵ヲ大和ニ舉ケ幕兵ト  
戦ヒ之ニ死ス

安岡斧太郎

森下幾馬

右武市半平太ニ同盟シ文久壬戌同  
志ト江戸ニ赴キ謀ル所アリ翌年中  
山忠光ノ一舉ニ加ハリ幾馬ハ戦鬪之  
ニ死シ斧太郎ハ幕兵ノ為ニ捕ハレ  
京都ノ獄中ニ斬ラル

楠目清馬

土居佐之助

森下儀之助

澤村幸吉

田所騰次郎

島村省吾

右武市半平太ニ同盟シ國事ニ奔  
走シ文久癸亥中山忠光ノ一擧ニ  
加ハリ清馬ハ戰死依之助等五人ハ  
捕ヘラレテ京都ノ獄中ニ斬ラル

内閣

能勢達太郎

右文久癸亥北添佶磨等ト謀ル所ア  
リテ箱館ニ航渡シ奥羽諸藩ノ行情  
ヲ視察シ京師ニ還ルニ及ヒテ朝議一  
變シ幕吏志士ヲ逮捕スルコト太々  
急ナリ達太郎各所ニ潜匿シ竊ニ籌  
圖スル所アリ元治甲子長門ニ赴キ  
三條實美等ニ謁シ京師ノ行情ヲ報  
シ長門藩人ノ上京ニ際シ其隊中ニ  
加ハリ事敗レテ天王山ニ自殺ス

めくれず

伊藤甲之助

右文久癸亥京師ニ在リ諸有志ト時務ヲ議シ三條實美等ノ西奔スルヤ之ニ後フ元治甲子長門藩人ト共ニ京師ニ至リ堺町門内ニ於テ戦鬪之ニ死ス

安東真之助

右文久壬戌京師ニ出テ國事ニ奔走ス翌年土佐ニ還ル藩論一變スルヲ以テ脱藩長州ニ赴キ元治甲子長門藩人ノ一擧ニ加ハリ天王山ニ自殺ス

内閣

柳井健次

上岡膽治

尾崎幸之進

中平龍之助

那須俊平

右武市半平太同盟ノ士ニシテ文久壬戌以來國事ニ奔走シ京都又ハ江戸ニ出テ諸藩有志ノ士ト相交リ後藩論一變半平太等獄ニ下ルヤ五人前後脱

藩長州ニ奔リ元治甲子長門藩人ノ  
拳ニ加ハリ鷹司邸ニ戦死ス

相原禎吉

右文久壬戌勅使三條實美ニ從ヒ江戸  
ニ赴キ元治甲子清岡道之助ト藩論  
反正ヲ謀リ野根山ニ屯集シ藩吏ノ  
為メニ捕ハレテ斬ラル

近藤次郎太郎

豊永 弁馬

右文久壬戌京都江戸ニ往来シ國事

内閣

ニ盡カス元治甲子清岡道之助ト謀  
リ野根山ニ屯集シ捕ハレテ斬ラル

石川潤次郎

右元治甲子京師ニ在リ同志ノ士ト  
相結ヒ望月龜弥太等ト三條池田屋  
ニ會シ幕吏ト奮闘之ニ死ス

井原應輔

千屋金策

島浪間

右武市半平太同盟ノ士ニシテ應輔

ハ文久癸亥京師ニ在リ姉小路公知ノ  
暗殺ニ遭フヤ吉村寅太郎ト乞人ノ  
姿ニ扮シ薩摩藩邸ノ門外ニ起卧シ  
嫌疑者田中新兵衛ノ潜匿ヲ偵知シ  
テ之ヲ捕縛セシメ後藩論一變、為ニ  
家ニ幽錮セラレ後脱藩シテ長州ニ奔  
ル金策ハ文久壬戌同志ト江戸ニ赴キ  
又京師ニ上リ國事ニ盡カス後藩論  
一變ヲ見テ脱藩シテ長州ニ奔ル浪  
間ハ文久癸亥京師ニ上リ國事ニ奔  
走シ大和ノ一舉ニ加ハリ事敗ルニ  
及ヒテ長州ニ奔ル元治甲子三人相  
謀リ山陰道ニ赴キ美作ニ於テ土人  
ノ為ニ銃槍ヲ以テ追撃セラレ終ニ相  
共ニ自殺ス

内閣

宮地宜蔵

右夙ニ勤王ノ志ヲ抱キ文久壬戌吉  
村寅太郎ト共ニ脱藩シテ大阪ニ出  
ツ平野次郎等ノ一舉ニ加ハリ事敗  
ル、ニ及ヒテ本藩ニ帰サル後赦サレ

テ上京シ三條實美守衛ノ負ニ加ハリ  
疾ヲ發シテ死ス

### 大利鼎吉

右夙ニ尊攘ノ説ヲ唱ヘ文久壬戌同  
志ト江戸ニ赴キ又京師ニ上ル武市  
半平太等ノ獄ニ下ルニ及ヒテ脱藩  
シ長州ニ投ヌ元治甲子長門藩人  
京師ノ一擧ニ加ハリ事敗レテ又長  
州ニ奔ル後大坂ニ在テ幕吏ノ為ニ  
捕ハレントシ奮闘之ニ死ス

内閣

### 近藤昶次郎

右文久壬戌江戸ニ在リ坂本龍馬ト  
勝麟太郎ニ從テ京都ニ上リ航海術  
ヲ學ヒ神戸海軍所ニ寓シ諸藩ノ  
志士ト交ル元治甲子藩ヨリ帰國ヲ  
命ス昶次郎薩摩藩ニ投シ慶應丙  
寅自殺ス

### 澤村總之丞

右夙ニ尊攘ノ説ヲ唱ヘ文久壬戌脱藩  
シテ京師ニ上リ國事ニ盡カス後

勝麟太郎、門ニ入ル坂本龍馬、海  
援隊ヲ編成スルヤ之ヲ助ク慶應丙  
寅長門藩兵ノ小倉ヲ伐ツヤ總之丞  
搭スル所ノ船艦ヲ以テ長兵ヲ助ケ大  
勝ヲ獲タリ明治維新ノ際海援隊  
等ト長崎奉行ノ館ヲ収メ之ヲ警  
衛シ自殺ス

宮川助五郎

右武市半平太同盟ノ士ニシテ文久年  
間京師ニ出テ諸藩ノ志士ト交リ藩  
論一變スルニ及ヒテ脱藩シ國事ニ盡  
力ス新撰組ノ為ニ刺サレ死シテ復々  
蘇ル明治維新ノ際仁和寺總督宮ノ  
軍ニ從ヒ又函館ノ役ニ切マリ繼テ病  
ヲ以テ没ス

内閣

上田楠次

右文久卒西武市半平太ノ尊攘説  
ヲ唱フルヤ首トシテ其盟約ニ加リ翌  
年江戸ニ往キ同志間寄哲馬ト相  
謀ル所マリテ長門水戸等有志ノ

士ト交ヲ結フ癸亥ノ歲京師ニ上リ  
益スカラテ國事ニ致ス藩論一變半平  
太等ノ獄ニ下ルニ及ヒテ楠次藩廳ニ  
上リ屢之ヲ痛論ス明治維新ノ際  
東山道總督ノ軍ニ從ヒ総野ノ間ニ  
奮戰終ニ敵丸ニ中リテ死ス

小笠原只八

右文久辛酉江戸ニ在リ前藩主山  
内豊信ノ謹慎ヲ解カル、ヤ其拔擢  
スル所ト為リ側物頭ニ登庸セラレ

内閣

板垣退助等ト共ニ京都ニ上ル吉田  
元吉ノ用井ララル、ヤ退助ト藩職ヲ  
辞セシモ亦再出テ、大監察ト為リ  
藩論一變スルニ及ヒテ又職ヲ辞ス其  
後退助ノ西郷隆盛ト討幕ノ舉ヲ約  
スルヤ只八同志ヲ率呼之ニ應セント  
シ其期ヲ俟ツ伏見ノ役起ルノ時ニ方  
リ朝命ヲ奉シ松山藩ヲ降タシ繼テ三  
條實美ノ命ヲ卽ミ江戸ニ赴キ其形  
情ヲ報告シ又官軍ニ從ヒ會津ヲ追



撃シ敵ノ砲丸ニ中リテ斃ル

### 安岡覺之助

右武市半平太同盟ノ士ニシテ文久壬戌京都ニ在テ土方久元等ト國事ニ執掌ス翌年藩論一變シ半平太等ト同ク獄ニ繫カレ明治維新ノ初赦サレテ藩軍ニ從ヒ板垣退助ノ左右ニ在テ軍議ニ參預ス退助死シ澤本楠彌ヲ米澤城ニ遣ハシ其降服ヲ促サシメシハ覺之助ノ曾テ畫策セシ所ヲ用ヒシニ由ル會津進撃ノ時ニ於テ敵ノ流丸ニ中リテ死ス

内閣

### 島村雅事

右文久辛酉武市半平太江戸ヨリ歸リ尊攘ノ説ヲ唱フルニ方リ之ヲ援助シ幕藩勤王ノ事ニ盡カス半平太ノ藩主ニ從ヒ京師ニ上ルヤ雅事土佐ニ留リ同志五十人ト江戸ニ赴カンコトヲ計謀ス癸亥ノ歲京師江戸ノ間ニ往來シ國事ニ執掌ス藩

論一變シ有志、少壯憤激スルニ際シ  
雅事之ヲ鎮撫シ藩論、反正ニ盡瘁  
ス半平太等ノ獄ニ下ルニ及ヒ雅事  
モ亦謹慎ヲ命セラレ半平太屠腹ト  
同時ニ永牢ニ處セラル慶應丁卯赦  
サレテ獄ヲ出テ明治維新、後病  
ニ罹テ没ス

島村洲平

右武市半平太尊攘、説ヲ贊助シ文  
久壬戌同志五十人相謀リ江戸ニ赴

内閣

カントス皆資力ナシ洲平其叔父雅  
事ト商議シ所有田園ヲ賣却シ金  
千兩ヲ獲テ其旅費ニ供ス癸亥、  
歳前藩主豊信ニ後ヒ京師ニ上リ國  
事ニ執筆ス藩論一變スルニ及ヒ同  
志ト相謀リ其反正ニ盡力ス明治  
維新、際東征ニ從軍シ後病ニ罹  
テ没ス

古澤南洋

右夙ニ王室ノ式微ヲ慨キ時機ヲ見

テ為ス所アラントシ子弟ヲ教養ス  
ルニ毎ニ忠孝ノ事ヲ以テス文久辛酉  
西武市半平太ノ尊攘ヲ唱フルヤ  
南洋全家骨肉ヲ攀ケテ之ニ後事ヤ  
シメントス家世擊劍ノ師範タリ門  
人頗ル多キヲ以テ之ヲ激勵シテ同  
盟ニ加ハラシム文久壬戌四方ノ志士  
京師ニ集ル南洋其二子ヲシテ上京  
之ニ會セシメ己レハ國ニ留リテ益  
人心ヲ鼓舞ス翌年藩論一變半平  
太等獄ニ下ルニ及ヒテ南洋モ亦  
家ニ錮セララル元治甲子伐長ノ役起  
ルヤ南洋脱藩難ニ長州ニ赴ク是ニ  
於テ族祿ヲ褫奪セララル後藩ニ於テ  
獄ニ繫カル慶應下知罪ヲ減シテ  
蟄居ヲ命セラレ明治維新ノ際赦  
免セララル後病ニ罹テ没ス

片岡孫五郎

右夙ニ勤王ノ志ヲ抱キ文久辛酉  
武市半平太ノ尊攘說ヲ唱フルニ

及ヒテ之ニ應シテ同盟シ或ハ同志  
ノ危難ヲ救ヒ或ハ貧困ヲ惠ミ終  
始國事ニ盡カス慶應丁卯病ニ罹  
テ没ス

宮田頼吉

右武市半平太ニ從ヒ屢京都ニ往來  
シ盡カスル所アリ後藩論一變スル  
ヤ清岡道之助等ト相謀リ野根山ニ  
屯集強請セントシ終ニ斬首セラル

安岡鍊馬

内

閣

田中収吉

檜垣繁太郎

寺尾權平

木下嘉久次

新井竹次郎

横山英吉

小川官次

木下慎之助

柏原省三

千屋熊太郎

岡松惠之助

宮田節齋

須賀恒次

吉本培助

川島総次

宮地孫市

右清岡道之助等ト相謀リ野根山ニ  
化集シ終ニ斬ラル

野老山吾吉郎

藤崎八郎

内閣

右藩命ヲ以テ京都ニ上リ密ニ同志ト  
謀ル所アリ元治甲子板倉筑前介  
ノ家ニ會集シ新撰組ノ為ニ捕ヘラ  
レントシ重傷ヲ負テ死ス

安藤鎌治

藤寄吉五郎

右藩命ヲ以テ京都ニ上リ國事ニ奔  
走シ慶應丙寅同志ト三條制札場ノ  
長人犯闕ノ標榜ヲ奪フニ方リ新撰  
組ト闘ヒ重傷ヲ負テ死ス

山本忠亮

右藩命ヲ以テ上京三條實美ノ守衛  
負タリ朝議一變スルニ及ヒテ實美  
ニ從フテ長州ニ下リ慶應丙寅憤  
慨、餘自刃シテ死ス

安岡勘馬

右藩命ヲ以テ京都ニ上リ朝議一變  
スルニ及ヒ脱藩シ三條實美ニ從ヒ長  
州ニ下リ元治甲子京都ニ潜匿シ  
謀ル所アリ憤慨ノ餘自殺ス

内閣

豊永伊左馬

右文久壬戌脱藩シテ國事ニ盡力セ  
ントシ事露レテ獄ニ繋カル時ニ吉  
村寅太郎伏見ノ一舉ニ敗レテ獄ニ  
在リ共ニ前途ノ謀ヲ議ス赦サレテ  
獄ヲ出ルヤ京師ニ上リ國事ニ盡  
カシ會マ街上ニ於テ暗殺セラレ

小松勇道

右夙ニ勤王ノ志ヲ抱キ有志ノ士ト  
交ル元治甲子國ヲ脱シテ長門ニ赴

ク慶應乙丑長門内乱ノ時游撃隊ニ  
属シ俗論黨ト闘ヒ翌年又幕軍ト  
戦フ病ニ罹リ終ニ没ス

桑原義之助

右武市半平太ニ同盟シ國事ニ奔走  
ス元治甲子脱藩シテ長門ニ奔リ三  
條實美等ノ守衛負トナル後游撃  
隊ニ入り後軍中病ニ罹リテ没ス

中島與一郎

右武市半平太ニ同盟シ藩論ノ變ス  
ルニ及ヒテ藩ヲ脱セントシ國境ニ至  
リ病テ歩スルコト能ハス忽チ村吏  
ノ知ル所ト為リ銃ヲ取テ圍マル與  
一郎身脱ス可カラサルヲ知り自殺  
ス

掛橋和泉

右武市半平太ニ同盟シ同志ト上京  
ヲ約シ物品ヲ賣却シテ旅費ニ充  
テントシ養母ノ知ル所ト為リ詰  
問セララル和泉事實ヲ吐露スルコト

能ハス養父ノ墓前ニ於テ自殺ス

小松小太郎

右文久癸亥京師ニ上リ國事ニ奔  
走ス北添倍磨ト蝦夷地ノ形情ヲ  
視察セントシ越前敦賀ヨリ箱館ニ  
至ル航海中病ヲ癸シテ没ス

内閣



元水戸藩

點澤伊太夫

右夙ニ尊王憂世ノ志ヲ抱キ安政戊午ノ歲  
外國條約ノ議熾シナルヤ薩摩ノ日下部伊  
三次始メ諸藩ノ志士ト國事ヲ議シ奔走ス  
ル所アリ既ニシテ勅諭ノ藩主ニ降ルニ際シ伊  
太夫速ニ列藩ニ傳達シ朝旨ヲ奉行センコト  
ヲ謀ル幕府之ヲ沮格シ志士ヲ逮捕スル甚々  
急ニシテ伊太夫モ亦獄ニ繫カレ遂ニ遠嶋ニ處  
セラレ後大赦ニ遭テ藩ニ還ル元治甲子ノ  
歲支藩松平大炊頭ニ隨後シ市川三左衛  
門ノ徒ト戰鬪シ又武田耕雲齋ト共ニ西上  
シ潛ニ京師ニ入り同志ト相謀リ國事ニ  
周旋ス明治戊辰ノ歲水戸城下ニ於テ  
敵兵ノ砲丸ニ中リテ死ス

常陸國新治郡浦浪村

佐久良東雄

右夙ニ心ヲ國典ニ潜メ皇室ノ衰微ヲ  
慨キ竊ニ其恢復ヲ圖ルヲ以テ已レカ  
任ト為シ四方ニ周遊シテ同志ノ士ヲ  
求ム萬延庚申ノ頃大坂ニ在リ會マ  
高橋多一郎父子井伊直弼ヲ江戸櫻  
田ニ斬リ逃レ來ル之ヲ庇保シタルモ  
幕吏ノ逮捕嚴急ナルカ為ニ多一郎  
父子遂ニ自刃シ東雄ノ義弟島男  
也捕縛ニ就ク東雄モ大坂町奉行  
所ニ拘留セラレ江戸ニ檻送セラレ  
ニ及ヒテ傳馬町ノ獄中ニ死ス

元秋月藩

戸原 卯橋

右夙ニ尊王憂國ノ念深ク諸藩有志ノ士  
ト交リヲ結ヒ國事ヲ議ス當時秋月藩吏ハ  
幕府ヲ畏怖スルコト尤甚シ卯橋ハ同藩海  
賀宮門ト力ヲ戮セ尊王論ヲ主張シ屢藩  
主ニ建言ス宮門藩旨ニ忤ヒ幽錮セラレ卯橋  
益ス慷慨シ正名論ヲ著シ少年ヲ鼓舞ス文  
久壬戌ノ歲宮門藩ヲ脱シ京都ニ上ルニ及ヒ  
テ卯橋遂ニ幽錮セラレ翌癸亥ノ歲藩ヲ脱シ  
長州ニ奔リ継テ澤宣嘉ヲ奉シ但馬ノ生野  
ニ據リ義ヲ唱フ幕兵ノ来リ伐ツニ方リ河  
上弥市等ト共ニ妙見山ニ自殺ス

元岡山藩

牧野權六郎

右夙ニ勤王ノ志ヲ抱キ少壯ヨリ  
心ヲ文武ノ學ニ留メ藩ノ軍監ト  
為ルヤ邊海ノ防備節度宜キヲ得  
又藩政ヲ改革スルヤ贊襄ノ力尤  
モ多ク明治戊辰ノ東征己巳ノ北  
伐兩役ニ於テ藩士ノ奮戦セシハ  
權六郎ノ平常獎勵スル所ニ出ツ且  
慶應丁卯ノ秋藩老日置帶刀ト  
連署ノ書ヲ徳川慶喜ニ上ツリ政  
務ノ失措ヲ諫メ其冬慶喜ノ政柄  
歸朝ノ咨問ニ與カル繼テ大政維新  
ノ詔降ルニ及ヒテ朝廷ノ徵召ヲ蒙  
ルモ偶々大患ニ罹リ官ニ就クコ  
ト能ハス未タ幾クナラスシテ終ニ  
没ス

岡 元太郎

右夙ニ勤王ノ志ヲ抱キ萬延年間

京師ニ入り有志ノ士ト交ル文久癸  
亥同志ト足利三代ノ木像ノ首ヲ  
三條橋ニ梟シ同志ノ捕ハルノ時  
ニ於テ中國ニ遊説スルヲ以テ縲紲ヲ  
免ルコトヲ得タリ元治甲子岡山ニ  
於テ新撰組松山某ヲ斬リ藩廳ニ  
自首スルニ依リ少時幽錮セラル慶  
應乙丑美作國英田郡土居驛ニ於  
テ村民ノ為ニ圍マレ身脱ス可カラ  
サルヲ知り自刃シテ死ス

内

閣

元刈谷藩

宍戸弥四郎

右夙ニ勤王ノ志厚ク嘉永癸丑ノ歲米國  
使節ノ渡来スルヤ藩主ノ命ヲ兼ケ江戸ニ  
出テ兵備ヲ講究シ後東西ニ奔走シテ諸藩  
ノ有志ト交リ國事ヲ論ス文久癸亥ノ歲  
松本謙三郎藤本津之助等ト共ニ中山忠  
光ヲ擁シ兵ヲ大和ニ舉ク幕兵ノ来リ伐ニ  
方リテ弥四郎毎ニ帷幕ニ參シ事敗ルニ  
及ヒ鷲家口ニ於テ敵ノ銃丸ニ中ツテ死ス

元德山藩

児玉次郎彦

右夙ニ皇室ノ式微ヲ歎シ宗藩ノ久坂義助入江九一郎寺嶋忠三郎等ト交厚シ文久壬戌ノ歲藩主ニ從テ入京シ江村彦之進ト王事ニ周旋ス翌癸亥ノ歲長防二國人ノ入京ヲ禁止セラル、ヤ物情洵々トシテ俗論黨勢ヲ得ルノ形頗ル顯ハル、ヲ以テ子弟ヲ戒飭シ尊王ノ大義ヲ愆マラサシムルコトヲカム元治甲子ノ歲京師ノ役敗ル、ニ及ヒテ藩論沸騰シ終ニ反對黨ノ為ニ暗殺セラル

江村彦之進

右平素皇威不振政道ノ凌夷ヲ歎シ士氣ヲ作興シ類細ヲ挽回スルヲ以テ自ラ任ヌ嘉永癸丑ノ歲米國使節渡來以降屢藩主ニ建言シテ時務ヲ論ス文久壬戌ノ歲藩主ニ從テ入京シ諸藩ノ有志ト交リヲ結ヒ且宗藩ヲ佐ケカヲ國事ニ竭ス元治甲子ノ歲京師ノ

役起リ國難切迫ニ際シ俗論黨ノ為ニ禁錮セ  
ラレ尋テ殺サル

本城 清

右安政年間江村彦之進ト諸國ニ漫遊シ各  
藩ノ形情ヲ視察ス文久年間藩主ヲ佐ケ機  
務ニ參シ國事ニ執掌ス元治甲子京師ノ  
役起ルノ後俗論黨ノ為ニ禁錮セラレ尋テ  
殺サル

河田 佳藏

右文久壬戌ノ歲藩主ニ從フテ入京シ國事ニ  
奔走ス元治甲子ノ歲京師ノ役敗ルニ及  
ヒテ藩論沸騰シ反對黨ノ為ニ獄ニ下サレ  
尋テ斬ラル

淺見 安之丞

右夙ニ志ヲ勤王ニ勵マシ文久癸亥ノ歲御  
親兵ト為リ京師ニ在リ八月十八日ノ變ニ  
遭フテ國ニ還ル元治甲子ノ歲京師ノ役  
起リ藩論沸騰反對黨ノ為ニ獄ニ下サレ縊  
殺セララル

信田 作太夫



右夙ニ尊攘ノ志深ク文久壬戌ノ歳勅使  
姉小路公知ニ後ヲテ江戸ニ下リ王事ニ周  
旋シ翌癸亥ノ歳御親兵ニ加ハル元治甲子  
京師ノ役起ルノ後俗論黨ノ為ニ獄ニ下サレ  
縊殺セラレ

井上唯一

右夙ニ勤王ヲ唱ヘ同志ト結托シ京師ニ  
入り國事ニ奔走ス文久癸亥ノ歳三條  
實美寺西竄ニ際シ之ニ後ヲテ長門ニ下  
リ尋テ奇兵隊ニ加ハリ京撰ノ間ニ往来  
ス元治甲子京師ノ役起ルノ後俗論黨ノ  
為ニ獄ニ繫カレ尋テ斬ラレ

元津山藩

鞍懸寅次郎

右平素皇室ノ衰微ヲ慨キ文久壬戌ノ歲京師ニ入り國事ニ鞅掌シ尋テ京都江戸ノ間ニ奔走シ廣ク有志ノ士ト交リ尊攘ノ説ヲ持シテ朝紳幕老及諸藩主ニ建言ス元治甲子ノ歲伐長ノ役起ルニ及ヒテ寅次郎藩主ニ説キ之ヲ幕府ニ諫止セシメントス聽カレス慶應

丙寅ノ歲幕府再ヒ伐長ノ師ヲ起ス寅次郎又藩主ヲシテ其役ヲ諫止セシメントス又聽カレス明治戊辰ノ歲伏見ノ役起ルヤ藩論喧擾ス寅次郎之ヲ鎮静シ頗ル力ム後廢藩置縣ノ際兇徒ノ為ニ暗殺セラレ

元佐土原藩

池上隼之助

右夙ニ尊王ノ志深ク淺見綱齋ノ門葉上  
原甚太郎ニ就キ學業ヲ修メ梅田源次郎  
ト相交結ス源次郎毎ニ語リテ曰ク心ハ上原  
先生ヲ學ヘヨ眼ハ源次郎ヲ學フヘシト後  
藩主ニ從ヒ江戸ニ在勤シ四方ノ志士ト交  
リ國事ヲ議ス安政戊午ノ大獄起ルニ及ヒ  
テ隼之助水戸郎ニ往キ前中納言齊昭ニ  
謁シ其匡救ノ策ヲ獻セントシ事成ラス又  
老中ノ門ニ奔走シ之ヲ諷諫セント欲シ終  
ニ藩吏ノ論スル所ト為リ重譴ヲ蒙リ幽錮  
セラル文久壬戌ノ歲鹿兒嶋ノ同志柴山愛  
次郎橋口宗助等ヨリ義舉ノ密報ヲ獲テ  
俄ニ國ヲ奔シ大坂ニ赴キ同志ト會合ス伏  
見寺田屋ノ事起ルニ及ヒテ藩地ニ護送セ  
ラレ又幽錮セラル翌癸亥ノ歲赦サレテ藩  
主ノ近習ト為リ國事ニ執掌シ尋テ英艦  
ノ鹿兒嶋灣ヲ撃ツニ方リ旗奉行ト為リ之

ヲ赴援ス元治甲子ノ歳病ヲ以テ没ス

内閣

美濃不破郡赤坂村醫

所 郁太郎

右毎ニ幕府ノ專横ヲ憤リ心ヲ王事ニ  
盡クシ廣ク四方ノ志士ト交ル文久ノ初  
長門藩ノ醫負ト為リ國事ニ參シ規畫  
頗ルカム癸亥ノ歲八月十八日ノ變起ルニ  
及ヒ藩人ニ從ヒ長州ニ下リ遊撃隊ニ加ハ  
リ軍事ニ參議ス元治甲子ノ歲京師ノ  
役敗ルニ及ヒ又長州ニ下ル慶應乙丑ノ  
歲高杉晋作ノ國論ヲ匡正スルノ時ニ於  
テ遊撃隊ノ參謀ト為リ籌畫ノ功尤多  
シ尋テ告敷ノ陣營ニ病死ス

元金澤藩

松平大貳

右文久癸亥ノ歲幕府ヨリ藩主父子ヲ  
召ス要路皆々其命ニ應スヘシト論スル  
ニ有志ノ士ハ之ヲ不可トシ藩論分  
岐ス大貳遂ニ其東行ヲ止ムルコトニ  
尤祖ス後藩世子前田慶寧上京國  
家ノ為ニ盡ス所アラントシ元治甲  
子ノ春遂ニ上京ス時ニ幕吏長州藩  
ヲ憎ムコト甚シ慶寧救援ヲカメ大  
貳ニ命シ其意見書ヲ閣老ニ呈シ  
之ヲ論セシム其七月ニ至リ長州人  
禁門ニ逼リ會桑二藩ノ兵ト戦フ  
慶寧之ヲ見テ近江ノ海津ニ引退キ  
乘輿外ニ出ツル有ラハ之ヲ奉迎シ護  
衛ノ任ニ當ランコトヲ圖ル藩主齊泰  
使ヲ馳セ慶寧ヲ責ム大貳老職ヲ以テ  
世子ノ側ニ在テ補佐ノ道ヲ失フト謝  
シ海津ノ驛舎ニ於テ屠腹シテ死ス

信濃松本町

山本貞一郎

右尊攘ノ志ヲ抱キ安政戊午ノ歳京師ニ  
上リ浮田一蕙等ト謀リ窃ニ青蓮院宮三條  
内大臣等ノ第ニ出入シ勅使ヲ関東ニ遣シ  
井伊直弼ヲ忤ケ徳川齊昭徳川慶勝ヲ廢黜ヨ  
リ起シ政務ヲ匡正スルノ策ヲ上ツリ且時務ヲ  
論ス幕吏將サニ志士ヲ逮捕セントスルヲ聞  
キ其身ノ免ヌカル可カラサルヲ知り終ニ毒  
葉ヲ服シテ死ス

内閣

元鳥取藩

中井範五郎

右夙ニ勤王ノ志厚ク少壯ニシテ心ヲ武備ニ潜メ専ラ海防ヲ講究ス文久癸亥ノ歳四條隆訶ニ從ヒ播淡二州ニ赴キ頗ル盡力スル所アリ帰京ノ後河田景與等ト藩主ヲシテ勤王ノ實效ヲ舉ケシメシコトヲ謀リ君側ノ姦ヲ掃フ之カ為ニ鳥取ニ幽囚セラル慶應丙寅ノ歳脱獄シテ長州ニ赴キ大村益次郎ニ就キ兵學ヲ研究ス翌丁卯ノ秋長藩ノ密旨ヲ啣シ京師ニ往返ス明治戊辰ノ役東山道總督ニ從テ東下シ大總督府軍監ト為リ豆相二州ヲ巡視ス會マ林昌之助箱根ニ據ルヲ以テ小田原藩兵ヲ率井之ヲ掃攘セントスルニ藩兵叛テ昌之助ニ應シ途中ニ於テ斬殺セラル

奥田萬次郎

右夙ニ勤王ノ志厚ク文久癸亥ノ歳藩主ニ從ヒ京師ニ上リ河田景與等ト共ニ君側



ノ姦ヲ掃ヒ而シテ國家ノ為ニ行フト雖人  
ヲ殺シテ自ラ活ルハ武士ノ道ニ非スト思  
惟シ屠腹シテ死ス

横田友次郎

右毎ニ名分ノ紊乱ヲ慨キ談皇室式微ノ  
事ニ及ハハ嗚咽泣下ル文久ノ初國ヲ去リ  
テ四方ニ奔走シ藤本鍬石ノ徒ト專ラ國  
事ヲ協謀シ癸亥ノ歲平野次郎川上弥  
市等ト澤宣嘉ヲ擁シ兵ヲ但馬ノ生野  
ニ舉ケ事敗ル、ニ及ヒテ豊岡藩兵ノ  
為ニ捕ハレ元治甲子ノ歲京都六角ノ  
獄中ニ殺サル

尾崎健蔵

右夙ニ勤王ノ志ヲ起シ忠憤ニ堪ハス文  
久ノ初藤本鍬石ノ徒ト國事ニ奔走シ  
癸亥ノ歲大和ノ一舉ニ加ハリ事敗ル、  
ニ及ヒテ幕兵ノ為ニ捕ハレ元治甲子  
ノ歲京都六角ノ獄中ニ殺サル

仙石佐多雄

石川 一

右鳥取藩支封ニ仕、共ニ江戸定府  
士ナリ同ク平田派ノ古學ヲ修メ  
尊王ノ大義ヲ主張シテ皇室ノ式  
微ヲ痛歎シ遂ニ相携ヘテ脱走シ  
京師ニ入りテ諸有志ト心ヲ合セ國  
威振起ノ策ヲ運ラス文久三年二月  
同寓ノ士某々足利將軍木主ノ首  
ヲ梟シテ隱ニ徳川幕府ノ罪惡ヲ  
鳴ラス二人親ヲ手ヲ下サバルモ其  
事ノ連及スルヲ以テ頗ル戒心スル  
所アリ已ニシテ會兵來リ其寓所  
ヲ襲フ佐多雄奮闘ノ後樓上ニ登リ  
割腹シテ死ス一ハ不在ナリシヲ以テ  
免カレテ長州ニ下リ後中山忠光  
ガ大和ノ擧ニ加ハリ事敗レテ捕ト  
ナリ京都獄中ニ殺サル

加須屋貞蔵

右幼ニシテ武ヲ好ミ火技ヲ叔父右  
馬之允ニ受ク夙ニ水藩勤王ノ風  
ヲ慕ヒ心ヲ國事ニ傾ク文久三年

大坂ノ警衛ヲ命セラレテ藩邸ニ  
在リシガ六月姉小路公知カ暗殺セ  
ラレシ變ヲ聞キ憤慨ノ餘リ同志數  
人ト郎ヲ脱シテ入京シ諸處ニ潜伏  
シテ諸有志ト謀ヲ通ジケル中藩主  
其事ヲ生センヲ恐レ親族ニ命シ之  
ヲ搜索シテ歸國セシメントス負蔵  
志ノ行ハレサルヲ知り竟ニ堀川ノ  
客舎ニ於テ屠腹シテ死ス

高濱鐵之助

大谷準蔵

右共ニ藩醫ノ子ニシテ文學ヲ好  
ミ同ク藩學ノ教官ニ補セラレシカ  
常ニ尊王憂國ノ志深ク諸有志ト  
相提携シテ國事ニ奔走セリ慶  
應二年幕府再ニ伐長ノ師ヲ起シ  
本藩亦兵ヲ出ス二人憤慨シ執政  
要路ニ迫リテ其不可ヲ論陳ス俗  
吏大ニ之ヲ怒リ遂ニ獄廷ニ召喚  
ス二人乃チ其免カレ可カラサルヲ

曉  
り  
共  
ニ  
自  
刃  
シ  
テ  
死  
ス

内  
閣

200

伯耆會見郡日吉津村

須山 萬

右夙ニ勤王憂國ノ志ヲ抱キ鳥取藩ニ  
雇ハレテ周旋方トナリ東西ニ奔走シ  
諸志士ト交リ國事ニ盡カス元治元年  
江戸ニ赴キ長州ノ士ト相共ニ提携シ  
テ為ス所アラントス此時長州大ニ幕府  
ノ嫌疑ヲ受ケ其邸ニ出入スル亦難シ  
萬之ト絶ツニ忍ヒズ留主居遠藤某ノ  
家僕ト偽リ姓名ヲ小田清次ト變シ  
テ其邸ニ止マリシガ同年七月幕吏邸  
ヲ圍ミ人負ヲ檢査スルノ際萬ヲ捕ヘ  
テ拘留ス萬監卒ノ隙ヲ窺ヒ逃レ去リ  
剃髮僧侶ニ扮シ諸處ニ潛匿セシモ又  
縛セラレテ傳馬町ノ獄ニ下リ終ニ斬  
首セラル其責問ニ遇フヤ大聲幕府ノ  
罪惡ヲ數ヘテ罵リケレバ獄吏之ヲ憎  
ミ口ヲ開ク毎ニ其齒牙ヲ抉去リ盡ク  
レニ至ルト云

伯耆河村郡橋津村

中原吉兵衛

右未々弱冠ナラスシテ村吏トナリ善  
行嘉績ヲ以テ鳥取藩ニ聞ユ常ニ尊  
王憂世ノ志深ク事苟クモ皇室ニ及  
ハハ張眉慷慨繼クニ涕淚ヲ以テセサル  
ナシ常ニ志士ヲ愛シ屢其窮厄ヲ救  
フ水口ノ勤王家豊田美稻モ久シク  
此家ニ潜匿セシカ吉兵衛其子忠次  
郎ト美稻ノ説ヲ聞テ益ス報國ノ念  
ヲ固クセリ慶應二年七月本藩士河  
田景典吉田保實託間敬敷等カ破獄  
長州ニ奔ラントスルヤ吉兵衛父子之  
ヲ探聞シ大ニ其奉ニ感シ美保闔明  
神參詣ト称シ窈カニ船ヲ艤シテ之  
ヲ待テ景典等到ルニ及ヒ家族ヲ奉  
ケテ之ニ從フ途中ニシテ妻女ハ美保  
閨ニ於テ捕縛セラレ忠次郎ハ手結  
浦ニテ保實敬敷等ト共ニ追兵ヲ為

メニ殺サル吉兵衛景典等ト又シク長  
州ニ在テ國家ノ恢復ヲ圖リシカ明治  
一新ノ後郷里ニ歸ル家道落魄シ志ヲ  
得スシテ病死ス

内閣

203

紀州和歌山郷士

岩橋半三郎

右風ニ尊攘ノ志ヲ抱キ和漢ノ學ニ精  
クシテ奇才アリ屢藩主ニ時務策ヲ  
獻スルモ行ハレサルニ依リ國ヲ脱シ江戸  
ニ往キ姓名ヲ里見二郎ト改メ諸大名  
ノ執政ニ就キ時務ヲ論ス又京師ニ出  
テ諸有志ト交ヲ結ヒ或ハ播紳家ニ出  
入シ建言スル所アリ元治甲子ノ歲長  
州一擧ノ兵ニ加ハリ戰敗ル、ニ及ヒ長  
州ニ奔リ又岡田栄吉ト變名シ慶應  
丙寅ノ歲京師ニ入り幕吏ノ為ニ  
捕ハレ終ニ獄中ニ殺サル



元久留米藩

大鳥居理兵衛

右夙ニ尊王ノ志ヲ抱キ兄真木和泉守ト心ヲ合セ皇運挽回國威振張ヲ籌畫ス文久壬戌ノ歲上京シ同志ノ士ト大ニ為ス所アラントス途中ニ於テ藩廳捕吏ノ追踪スル所ト為リ事已ニ成ラサルヲ知り輿中ニ自刃ス

原道太

内閣

右夙ニ皇室ノ式微ヲ慨キ真木和泉守ノ蟄居ヲ命セラル、ノ時ニ方リ窃ニ之ヲ訪問シ共ニ時務ヲ計議ス文久壬戌ノ歲大坂ニ出テ諸有志ト謀ル所アリ伏見寺田屋ノ事起ルニ及ヒ國ニ送ラレ幽銅セララル翌癸亥ノ歲京師ニ上ル途中ニ於テ三條實美等ノ西奔スルニ邂逅シ隨後シテ三田尻ニ至リ其命ヲ羨ケテ薩摩ニ往ク元治甲子ノ歲長門一擧ノ兵ニ加ハリ終ニ鷹

司郎内ニテ斃ル

内閣

元宇都宮藩

岸上 弘

右夙ニ勤王ノ志厚ク文久壬戌ノ歳同  
志廣田精一ト俱ニ脱藩シテ京師ニ上リ  
又長防ノ間ニ奔走シテ國事ニ周旋シ元  
治甲子ノ歳長人ノ一舉ニ加ハリ會桑ノ  
兵ト勇戦シ終ニ天王山ニ於テ真木和泉  
守等ト屠腹シテ死ス

元仙臺藩

中嶋虎之助

右嘉永癸丑以降時事ニ慷慨シ藩ノ兵備ヲ繕ムルニ當リ式ヲ西洋ニ取り砲銃ヲ鑄造シ自ラ兵士ヲ訓練ス又又年間尊王ノ義ヲ唱ヘ藩主伊達慶邦ヲシテ朝廷ノ為ニ藩屏ノ任ヲ盡サシメント欲シ閩藩佐幕論ノ熾ンナルヲ顧ミス二三ノ同志ト周旋經畫シ慶邦ノ漸ク其議ヲ容ル、ニ際シ重臣ノ沮格スル所ト為リ讒証ニ遭フテ家ニ禁錮セラレ二三ノ同志モ亦皆幽默セラル虎之助藩論ノ正ニ歸ラサルヲ歎シ憂憤疾ヲ致シテ遂ニ起タズ明治維新ノ際三好監物ノ義ニ殉セシカ如キハ虎之助ノ遺志ヲ継キタルニ過キスト云フ

内閣

元村松藩

岡村定之丞

山崎弥平

中村勝右衛門

泉 仙介

稻垣覺之丞

右同藩下野勘平佐々耕庵ト相謀  
議シ藩主ヲシテ王事ニ勤勞セシ  
メント欲シ或ハ密ニ藩主ニ建言シ  
或ハ京師ニ上リ或ハ長門ニ赴キ諸  
有志ト相結托シテ大ニ為ス所アラ  
ントス終ニ藩吏ノ為ニ嫌疑セラレ  
慶應丙寅ニ至リ皆捕ヘラレ翌丁卯  
五月割腹ヲ命セラル

堀

齊

右初メ蒲生清助ト称ス同藩下野勘  
平ト共ニ尊王ノ大義ヲ明ラカニシ闔  
藩ノ士氣ヲ振作センコトヲ誓ヒ佐々  
耕庵岡村定之丞等ト社ヲ結ヒテ

時々其家ニ輪會シテ時務ヲ論ス  
勅平等割腹ヲ命セラルニ及ヒテ齊  
ハ終身禁錮ヲ命セラル明治維新ノ  
際官軍越後ニ至リ村松城ヲ取ルノ  
時ニ方リ齊身ヲ脱シ藩主ノ族貞  
次郎ニ後ヒ恭順ノ状ヲ告ケテ命ヲ  
俟ツ貞次郎封ヲ襲クニ及ヒ公議  
人ト為リ京師ニ出ツ薩長等四藩  
版籍ヲ奉還スト聞キ齊亦貞次郎  
ヲシテ之ニ倣ハシム後學校ヲ興シ  
專ラ人材養成ヲ事トス會マ病ニ  
罹リテ没ス

内閣

越後蒲原郡三條町醫

村山秀一郎

右夙ニ勤王ノ志厚ク文久年間京師ニ在テ  
藤本鑊石山中静逸等ト友善ニシテ諸藩  
ノ有志ト交ヲ結ヒ國事ニ周旋シ元治甲子  
ノ歲越後ニ還リ同志ヲ募リ義氣ヲ鼓舞  
ス明治戊辰ノ役越後ノ各藩會津ヲ援助シ  
官兵ニ抗ス秀一郎書ヲ北陸道總督ニ上ツ  
リ北越ノ情狀ヲ告ケ平定ノ計策ニ盡カス  
賊兵ノ為ニ捕ヘラレントスルニ及ヒテ終ニ自  
殺ス

内閣

越後刈羽郡柏崎

星野藤兵衛

右夙ニ勤王ノ志深ク家素ト豪富  
士民ヲシテ尊王愛國ノ心ヲ養成  
セシメント欲シ國史ヲ購求シテ廣  
ク有志ニ頒與シ且閭里ノ貧民ヲ  
救濟ス明治戊辰ノ歲北陸道總督  
ノ越後ニ入ルヤ藤兵衛數十人ノ偵  
者ヲ放チテ諸藩ノ形情ヲ探索シ  
テ之ヲ總督ニ密報ス桑名及米澤ノ  
藩士等屢之ヲ暗殺セント為シタル  
モ幸ニ免ルヲ獲且官軍ノ糧食薪  
炭ヲ供給スルコト數月ニ涉リ其費  
頗ル居多ナリ終始王事ノ為メ膏  
ニ心力ヲ竭クスノミナラス巨萬ノ  
財産ヲ蕩盡スルニ至ル後病ニ罹  
リテ没ス



美作魚田郡土井村

安藤鋈馬

右憂國ノ志ヲ抱キ水口豊田美稻ヲ  
師事シ共ニ皇室中興ヲ計議ス元  
治甲子ノ六月三條池田屋ノ事アル  
ノ後幕吏ニ拘ハレ途中ニテ捕吏ヲ  
斬リ遁レテ長州邸ニ匿ル繼テ長州  
一舉ノ兵ニ加ハリ堺門内ニ戦死ス

内

閣

元大洲藩

得能淡雲

右初メ藤森恭助ノ門ニ入り憂國ノ  
志深ク嘉永癸丑以來國家多端ナ  
ルヲ以テ髻ヲ截リ身ニ僧衣ヲ纏ヒ諸  
國ニ游歴シテ尊攘ノ大義ヲ説ク後  
大橋順蔵ニ從ヒ國事ヲ計議シ坂下  
ノ一舉ニ加ハリ終ニ幕吏ノ為ニ捕ハレ文  
久壬戌ノ歲獄中病ニ罹リ死ス

内

閣

元姫路藩

河合傳十郎

右夙ニ尊王ノ義ヲ唱ヘ養父總兵衛ヲ  
依ク文久壬戌ノ歳京師ニ入り諸志士ト  
交リ國事ニ奔走ス元治甲子ノ歳藩  
主ニ從フテ京師ニ在リ幕議曰循時事  
ノ日ニ非ナルヲ憤リ同藩江坂栄次郎ト  
共ニ脱走ス藩吏其踪跡ヲ索ムル尤嚴  
ナリ傳十郎大坂ノ土佐藩邸ニ匿ル實  
父境野求馬藩論ノ不振ヲ慨キ子弟ヲ  
鼓勵スルノ書ヲ遺シテ自殺スト聞キ憤  
慨益ス甚ク長州ニ至リ志ヲ展ヘント  
欲シ大坂ヲ出ルニ及ヒテ藩吏ノ捕フ  
所ト為リ獄ニ繫カレ拷問數回ノ後斬  
首セララル

伊舟城源一郎

右夙ニ尊王憂國ノ念深ク文久壬戌ノ  
歳薩長ニ藩京師ニ入覲シ志士來集尊  
王ノ大義ヲ唱フルニ姫路藩ハ佐幕論黨

ヲ充タシ時機ヲ曉ラサルモノ多キヲ以テ  
源一郎慷慨ニ堪ヘス竊ニ同藩河合總兵  
衛等ト結托シ藩ニ請フテ京師ニ入り四  
方ノ志士ト交リヲ結ヒ大ニ計ル所アリ且  
藩地ト消息ヲ通シテ藩政改革ニ盡力  
ス翌癸亥藩命ヲ兼テ禁裡警衛ノ員ニ加  
ハリ三條實美姉小路公知等ノ邸ニ出入  
シ屢意見ヲ吐露ス實美長州ニ奔ルノ  
後幕府ヨリ京師退去ヲ命セラル、モ  
尚ホ潜伏シテ志士ト往来計ル所アリ

内

閣

適マ藩主入京スルヲ以テ大坂ニ至リ當  
時ノ形情ヲ説ク藩主命スルニ河合總兵  
衛ト共ニ江戸ニ至リ老中ニ面會シ朝旨  
遵奉ノ實效ヲ奉ケンコトヲ論セシム遂  
ニ幕府ノ忌諱ニ觸レ獄ニ下リ元治甲  
子ノ歲自刃ヲ命セラル

萩原虎六

江坂元之助

松下鍊馬

市川豊次

右風ニ尊王憂國ノ念深ク河合總兵衛  
ト結托シ大ニ計ル所アリ文久壬戌ノ冬  
伊舟城源一郎ト共ニ京師ニ入り諸志士ト  
交リ尋テ禁裏警衛ノ負ニ加ハリ姉小  
路公知等ニ就キ屢意見ヲ陳ヘ又正親  
町公董ノ勅ヲ奉シ長州ニ下向スルヤ皆  
之ニ随行シ輔佐スル所アリ三條實美  
等ノ西竄スルニ及ヒ京師退去ヲ命セラ  
ル、モ尚ホ潜匿シテ事ヲ圖リ終ニ幕府  
ノ忌諱ニ觸レ獄ニ下リ自刃ヲ命セラル

元大覺寺門跡療病院別當長

六物空滿

右尊王憂國ノ志厚シ嘉永癸丑米國使節  
渡來以降内勅ヲ奉シテ災異祈禳ノ事ヲ行ヒ  
且先帝御痔疾ニ惱ミ給フヲ以テ内旨ヲ羨  
々御藥ヲ調進ス安政戊午ノ歲國事ニ奔  
走スルヲ以テ幕吏ノ捕フ所ト為リ江戸ニ  
檻送セラレ終ニ獄中ニ病死ス

内閣

中山家家来

田中瑳磨介

右父贈正四位田中河内介ト共ニ國家  
ノ為ニ憂慮スル所アリテ議論往々  
先輩ヲ壓倒シ文久壬戌伏見ノ一  
舉ニ加ハリ事敗レテ鹿見島ニ送  
致セラルルニ際シ船中ニ於テ遂ニ父  
ト共ニ殺サル時ニ年十八ナリ

千葉郁太郎

内

開

右伯父田中河内介ト共ニ國事ニ  
奔走シ伏見ノ一舉敗レ鹿見嶋ニ  
送ラルル船中ニ於テ伯父ト共ニ殺  
サル

河内錦部郡甲田村農

水郡善之祐

右ハ夙ニ尊王ノ志厚ク嘉永癸丑ノ歲米國  
使節渡來國事多端ナルヲ見テ慨然志ヲ  
立テ郷黨ヲ鼓勵シ文武ノ學ヲ授ク且四方ノ  
有志ト交ヲ結ヒ時事ヲ論ス有志ノ寄食ス  
ルモノ常ニ十数名ニ下ラス文久癸亥ノ歲松  
本謙三郎藤本津之助等ノ中山忠光ヲ擁シ  
兵ヲ大和ニ舉クルヤ善之祐兵器ヲ給シ身  
亦其軍ニ從フ事敗ルニ及ヒ紀藩ノ為メニ  
捕ハレ元治甲子ノ歲京都六角ノ獄中ニ  
於テ斬ラル



元膳所藩

粟屋良之助

右尊攘ノ説ヲ唱ヘ計畫スル所アル  
モ藩力微弱事ノ成ス可カラサルヲ  
知リ藩ヲ辞シテ京師ニ出テ國事  
ニ盡カシ元治甲子長門人ノ軍ニ  
属シ堺町門内ニ於テ奮戦シテ死ス

高橋雄太郎

右尊攘ノ説ヲ唱ヘ藩ノ為ニ盡スニ  
忠誠ナラサル無ク終ニ藩吏ノ嫌  
忌スル所ト為リ慶應乙丑獄ニ下  
リ屠腹ヲ命セラル

田河藤馬之丞

右尊攘ノ説ヲ唱ヘ一藩ノ汚隆ヲ以  
テ一身ノ榮辱ト為ス文久癸亥大  
和行幸ノ令出テ藩主ヲ京ニ召サ  
ル藩議踴躍ス藤馬之丞同志ト断  
然奉命スヘシト主張シ藩主之ニ從  
フ慶應乙丑藩吏ノ嫌忌ニ觸レ獄ニ

下り終ニ屠腹ヲ命セラル

阿閑權之丞

右尊攘ノ説ヲ唱ヘ同志ト藩ノ為ニ謀畫スル所アリ藩吏ノ為ニ嫌疑セラレ慶應乙丑獄ニ下り終ニ屠腹ヲ命セラル

榎嶋錠之助

右尊攘ノ説ヲ唱ヘ同志等ノ藩主ニ謁シ勤王ノ事ヲ勸説スルヤ錠之助其議ニ與カリ共ニ為ス所アリ

内閣

トス慶應乙丑同志ノ獄ニ下ルニ際シ錠之助江戸ニ在リ藩吏國ニ檻致シ終ニ屠腹ヲ命セラル

増田仁右衛門

右尊攘ノ説ヲ唱ヘ元治甲子藩主ニ建言スルニ藩中ニ令シテ言路ヲ洞開シ且才能ヲ舉用シテ藩政ヲ整理シ及ヒ幕府ヲシテ朝旨ヲ遵奉シ膺懲ノ典ヲ奉ケシメ本藩其先鋒ニ充テラレシコトヲ請フノ意ヲ

以テス慶應乙丑藩吏ノ忌嫌ニ觸  
レ獄ニ下リ終ニ屠腹ヲ命セラル

深栖俊助

関元吉

渡邊宗吉

右尊攘ノ説ヲ唱ヘ同志ト計畫ス  
ル所アリ藩吏ノ為ニ嫌疑セラレ  
慶應乙丑獄ニ下リ終ニ屠腹ヲ  
命セラル

内  
関

大和國吉野郡十津川村

丸田監物

右嘉永癸丑米國使節渡來、時ニ方  
リ同志藤井織之助等ト名ヲ材木  
高用ニ託シ江戸ニ往來シテ形情ヲ  
視察シ且閭郷ノ人心ヲ鼓舞シ緩急  
ニ應センコトヲ謀ル尋テ京師ニ出テ  
梅田源次郎長門藩宍戸九郎兵衛ト  
密ニ計議スル所アリ文久壬戌以後ニ  
至リ專ラ國事ニ奔走シ慶應丁卯  
ノ冬鷲尾隆聚内勅ヲ奉シ兵ヲ率  
テ高野山ニ登ルヤ補翼兼參謀  
ト為リ明治維新ニ至テ親兵掛ト為  
リ盡力中病ニ罹リテ没ス

藤井織之助

右嘉永登丑米國使節渡來國情穩  
ナラサルヲ以テ織之助郷中有志ノ  
後ヲ會シ緩急ニ應センコトヲ謀議  
シ又梅田源次郎ト密ニ計畫スル

所アリ文久癸亥中山忠光ノ兵ヲ奉  
クルヤ之ニ投シテ頗ル力ヲ盡ス慶  
應丁卯ノ冬鷲尾隆聚ノ高野山ニ  
化スルヤ軍監兼旗本隊長ト為リ明  
治維新ニ至リ北越ニ從軍シ長岡城  
進撃ニ際シ敵丸ニ中リ病院ニ入ル  
ニ重傷ノ癒ユヘカラサルヲ知り自殺  
ス

深瀬 仲磨

右風ニ勤王ノ志ヲ抱キ文久壬戌  
郷中ノ同志ト上京シ一意尊攘ニ  
從事センコトヲ誓ヘリ慶應乙丑  
幕吏ノ為ニ捕ハレ獄ニ繫カレ翌  
年ニ至リ赦サル始終國事ニ苦辛  
シ明治維新ノ後ニ至リ病ニ罹リテ  
没ス

沖垣 齋宮

右文久ノ初ヨリ京坂ノ間ニ往来シ  
有志ノ士ト交ル中山忠光ノ兵ヲ  
奉クルニ及ヒ之ニ投シ一隊ノ長ト

為リ盡カス慶應丁卯ノ冬鷲尾  
隆聚ノ高野山ニ屯スルヤ軍監ト  
為ル明治維新ニ至リ親兵掛ト為  
リ後病ニ罹リテ没ス

沼田 龍

右文久ノ初ヨリ京師ニ出入シ外ニ  
四方ノ有志ト交リ内ニ郷中ノ盟  
友ト計リ國事ニ盡カス明治維  
新ノ後ニ至リ病ニ罹リテ没ス

前倉 温理

内閣

右文久ノ初ヨリ郷中ノ同志ト計リ  
國事ニ盡カス慶應丁卯ノ冬鷲  
尾隆聚ノ高野山ニ登ルヤ彈藥  
數萬發ヲ献シ明治維新ニ至リ親  
兵掛ト為リ後病ニ罹リテ没ス

佐古 高郷

右嘉永癸丑以來梅田源次郎ト計  
リ郷中ノ人心ヲ振起スルコトヲ務メ  
文久以降京師ニ出入シ國事ニ盡  
カス慶應丁卯ノ冬鷲尾隆聚ノ

高野山ニ屯スルヤ軍監ト為ル明治  
維新ノ後ニ至リ病ニ罹リテ没ス

内閣

27

大和國宇智郡五條町

乾 十郎

右梅田源次郎ノ塾ニ在テ其薰陶ヲ  
受ケ國事ヲ憂慮シ安政年間青  
蓮院宮ニ出入シ獻策スル所多シ  
文久癸亥中山忠光ノ兵ヲ奉クルヤ  
之ニ加ハリ事敗ルニ及ヒテ幕吏ノ  
為ニ捕ハレ元治甲子京師ノ獄中  
ニ於テ斬ラル

井澤宜庵

右ハ安政年間江戸ニ遊ヒ幕政失  
當士風不振ヲ見テ慷慨ニ堪ヘス  
還テ京師ニ至リ有志ノ士ト相  
結托シテ密計スル所アリ文久癸  
亥中山忠光ノ兵ヲ奉クルヤ之ニ

伊深ノ方甚多ク其ノ履息ノ井澤ヲ伊深ト  
出ル所ニアリ



大和國宇智郡五條町

乾 十郎

右梅田源次郎ノ塾ニ在テ其薰陶ヲ  
受ケ國事ヲ憂慮シ安政年間青  
蓮院宮ニ出入シ獻策スル所多シ  
文久癸亥中山忠光ノ兵ヲ奉クルヤ  
之ニ加ハリ事敗ルニ及ヒテ幕吏ノ  
為ニ捕ハレ元治甲子京師ノ獄中  
ニ於テ斬ラル

井澤 宜庵

右ハ安政年間江戸ニ遊ヒ幕政失  
當士風不振ヲ見テ慷慨ニ堪ヘス  
還テ京師ニ至リ有志ノ士ト相  
結托シテ密計スル所アリ文久癸  
亥中山忠光ノ兵ヲ奉クルヤ之ニ  
應シ各地ニ轉戦遂ニ幕兵ノ捕フ  
ル所ト為リ慶應乙丑ニ至テ京師  
ノ獄中ニ死ス

大和國吉野郡南芳野村

橋本若狹

右夙ニ皇威ノ不振ヲ慨キ屢京師  
ニ往來シ有志ノ士ト密計スル所  
アリ文久癸亥中山忠光ノ兵ヲ奉  
クルヤ之ニ應シ各地ニ轉戰事敗ル  
ルニ及ヒテ大坂ニ潜伏シ遂ニ幕吏  
ノ捕アル所ト為リ慶應乙丑京師  
ノ獄中ニ死ス